

Newsletter

2005.Jan. No.5

ユニークな「共有地」を目指して

教養研究センター所長 横山 千晶



2002年に、時代と社会の要請に対応できる教養教育の総合的なモデルの創出を目標として開設した慶應義塾大学教養研究センターも、今年

では4年目を迎えることになりました。羽田功初代所長を船長として出帆した本研究センターが開所のときに蒔いた種は、次々と芽吹き育ちつつあります。この育ちつつある苗をどのように元気に育てていったらよいのか、そしてどのようにして新たな「知」の蔓を伸ばしていったらよいのかがこれからの教養研究センターの課題です。

しかしながら、教養研究センターの意義と目的が周知のところとなっているのか、と問われれば、残念なことに答えは「まだまだ」です。センターの目的を多くの方々にわかっていただき、この活動に参加していただくことは、実は第一の課題といえそうです。

教養研究センターは学部や専門を越えて、人々が自由に行き来できるユニークな「共有地」です。創立以来2年半、このセンターという場でさまざまな活動が展開してまいりました。その活動の中で明確になってきた点。それは、それぞれの専門領域を越えて知を共有しあえることの醍醐味と、教育に携わる者としての共通の問題認識です。これからはその醍醐味と問題意識をさらに大勢の方たちに共有していただきたいのです。

付言すれば、「共有地」とは、それぞれの目標を達成するために結果よりも試行錯誤に力点を置き、自由闊達な議論が湧き出る場所を意味するでしょう。また「共有地」であるから

には使い方は利用する人次第です。研究と教育の実験と実践の場として、多くの人と語り、ともにやりたいことを論じ合い、まずは実際に試して見る機会を提供する。それこそがこのセンターの目指す顔です。

現在、教養研究センターが実際に取り組んでいるいくつかの試みには、教員と職員間の連携、所員と学生たちの共同研究プロジェクト、他大学の教員との共同研究、大学キャンパスと日吉という地域コミュニティとの共同企画、そして幼稚園から大学院までの一貫教育における密なコミュニケーションの確立などが挙げられます。また、こうして培われてきた知の蓄積と意識の高揚を、外へと伝え、広め、結合させていくことも、これからの教養研究センターの活動の一環です。構築されたネットワークのひとつひとつを強化していくとともに、さらにこのネットワークを広げていく中で、私たちの試みの過程と結果は外の世界と共有できることとなります。

大海原に帆を進める「船」であると同時に人々の集まる「港」にもなること。教養研究センターは常にそうありたいと思います。そのために皆様の変わらぬご理解とご支援を賜りますよう心よりお願いいたします。

CONTENTS

ユニークな「共有地」を目指して 横山 千晶	1
共同研究クローズアップ	2
活動報告	4
インフォメーション	8
事務局だより	8

フレーム意味論・構文的アプローチによる オンライン日本語語彙情報資源の構築

研究代表者：小原京子（理工）



2002年7月に、文部科学省・学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの言語知重点研究として、この「日本語フレームネット」プロジェクトを開始しました。究極の目的は、日本語語彙の意味分析を行い、その結果を電子語彙体系として整理していくことです。その際、コーパス（実際に使われた文の用例データベース）を題材に、日本語話者の持つ語彙に関する様々な背景知識（意味フレーム）に考

慮して意味記述を行います。2005年3月までにその雛型を作ろうとしています。

プロジェクトの特徴は、分析対象コーパスとは別に、分析結果を意味タグとして蓄積し意味タグ付けコーパスを作成して行く点です。また、同じく意味フレームに考慮して英語、スペイン語の電子語彙体系を構築している英語フレームネット、スペイン語フレームネットと連動しています。

インフラ整備と語彙意味分析の両方で成果が出てきています。インフラについては、分析用コーパスと、コーパス検索用コンピュータ・ツールが完成し、既に実際の分析に使っています。語彙意味分析では、「移動」や「言語コミュニケーション」に関する基本動詞を分析し、英語・日本語話者が持つ意味フレームに関する興味深い類似点や相違点が明らかになりつつあります。

「日本語フレームネット」プロジェクトは、言語学のみならず、辞書学、認知科学、自然言語処理、言語教育などかかわる学際的な新しい試みです。日吉キャンパスにおける学術「フロンティア」プロジェクトだからこそ始められたプロジェクトだと思えます。今までサポートしてくださった皆様どうもありがとうございました。今後ともよろしくをお願いします。

【メンバー】小原京子（理工）/石崎 俊（環境情報）/大堀壽夫（東京大学大学院）/斎藤博昭（理工）/鈴木亮子（経）/藤井聖子（東京大学大学院）

地域文化振興および社会教育と芸術ホール 日本の公立芸術ホールと米国大学 ホールの比較考察

研究代表者：中矢一義（法）

地域社会における芸術文化の役割に目を向け、芸術ホール事業を評価し、それを米国の先進例と比較することを目的として研究を推進しています。具体的には、1) 芸術ホール運営資料データ・ベースの作成、2) 芸術文化社会教育プログラム・モデル事業の調査、3) 米国の大学ホール調査、そして4) 芸術ホール評価の指針提言という4つの事柄を核にして、我が国における芸術ホール事業運営理念の再構築を目指して研究を行っています。

対象としている主な公立芸術ホールは、独自の文化振興財団を持つか、あるいは文化振興事業にかかわる専属スタッフを配置するなど、積極的に文化振興行政を展開している公的機関です。これら芸術ホールの活動で優れている点だけでなく、今後発展していくにあたってどのようなことが求められているのかも検証することで、文化育成と地方自治体の役割、地域文化の振興と芸術ホールとの関わりなどを考察しています。

また、米国の大学の多くにおいては、独自のホールを所有し、地域コミュニティに対してさまざまな文化プログラムを提供していますが、その中から、生涯学習や地域文化の育成という観点から先進的な活動を行っている大学のいくつかに注目



して、日本における公立芸術ホールの活動と比較しています。

公立芸術ホールは、今日、以前にも増して行政のアカウントビリティを求められています。そのガイドラインを本研究の成果から今後提供していきたいと考えています。また、大学のリベラル・アーツ教育における、さまざまな芸術や音楽のあり方、さらには大学と社会との対話のあり方について、ひとつのモデルを提示していくことに今後は力を注いでいく予定です。

【メンバー】中矢一義（法）/石井 明（経）/佐藤 望（商）

解析的整数論の諸相

研究代表者：桂田昌紀（経）

私たちの研究はここ数年来、その特異な経歴と業績で有名なインド数学者シュリニヴァーサ・ラマヌジャンの仕事と大きくリンクし始めてきました。彼の導いた公式群は、現在なお多くの数学者の研究をinspireし続けています。これらの背景について少々説明しましょう。

1913年、インドの無名の一事務官ラマヌジャンからケンブリッジ大学の世界的数学者ハーディのもとに届けられた奇妙な数式に満ちた手紙は、20世紀の数学史に少なからぬ影響を与えることとなります。ラマヌジャンの天才を見抜いたハーディは即座に彼のケンブリッジ招聘を決め、様々な紆余曲折の後、最上級カーストに属する彼にとっての禁忌を解く「戒を犯して海を渡れ」とのヒンドゥーの神様からの託宣が下ったことで、ケンブリッジにおけるハーディとの実り豊かな共同研究が始まります。この二人の重要な研究対象の一つに、級数 $\sum_{n=1}^{\infty} 1/n^s$ によって定義されるリーマンゼータ関数 $\zeta(s)$ があります。この関数については、現在なお未解明の謎が数多く、例えば、 $\zeta(s)$ の値に関して、 $s=2,4,\dots$ （偶数）のときには円周率 π を用いて記述することが可能ですが、他方、 $s=3,5,\dots$ （奇数）の

きの値を既知の数学定数で表すことは今のところ不可能です。

ラマヌジャンはこれら奇数点での $\zeta(s)$ の値をランベール型級数と結びつける不思議な公式を発見しました（ただし奇数1だけは $(1) = \infty$ となるため除外します）。パラモンの厳格な菜食主義を冷湿な気候の下で貫いたラマヌジャンは遂に病に倒れ、1919年インドに帰国します。病状が悪化するなか、 $|x| < 1$ に対し級数 $\sum_{n=0}^{\infty} x^{n^2}/(1-x)\dots(1-x^n)$ 等と与えられる、それまでの数学で捉えられることのなかった「擬テータ関数」（族）の発見についてハーディに書き送った手紙が彼の最期の研究となりました。

最近の私たちの研究成果の核心部分は、上で除外した奇数1の場合の $\zeta(s)$ の値に対する（仮想的な）公式が、なんと上述の擬テータ関数の特異点付近での漸近的挙動に付随して、実質的な意味を持って立ち現れるという事実の発見で、さらに広範に、テータ関数の特異点付近での挙動と、ゼータ関数の上述したような整数点における特殊値とが深く関係することも解明されつつあります。この方向の研究の更なる深化・発展が期待されます。

【メンバー】桂田昌紀（経）/天羽雅昭（群馬大学工学部）/塩川宇賢（理工）/田中孝明（理工）/西岡久美子（経）/畑政義（京都大学総合人間学部）/光道隆（経）/渡部睦夫（商）

Topics

トピックス

慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座について

1. 経緯

横浜市民大学講座は、平成15年、横浜市の決定により終了しました。思えば、昭和55年に横浜市民大学講座が日吉キャンパスで開講されて以来、平成15年の終結まで、24年間毎年テーマを替えて行ってきました。この講座の運営に携わってこられた先輩の先生方やサポートされてこられた職員の方々にあらためて感謝したいと思います。閉講式のときに存続を望む声を受講者の方々から立ち上がり、横浜市の通告を読み上げる田中俊郎常任理事も、市民の意向を汲む方向で考えると約束して、閉講式は終わりました。

そこで、これからは教養研究センターを中心に日吉キャンパス全体で公開講座に取り組むのがよいという結論を出し、あらたに「慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座」を立ち上げました。日吉キャンパスには、文・経済・法・商・医・理工学部の教養課程や体育研究所などの豊富な教授陣がありますが、その研究成果を系統的に提供して、知的好奇心の旺盛な社会人のニーズに応えたいと思います。

2. 地域に開かれた公開講座・教養研究に根ざした公開講座

新しい公開講座は、地域に開かれた講座であると同時に、教養教育に根ざした講座を目指しています。東横線日吉駅から徒歩2~3分で教室に行けるという立地条件の良さは、周知の通りです。知的空間としての日吉キャンパスと、反対側の日吉商店街や日吉町内会が相互に連携交流をし始めています。広報活動は、慶應義塾大学出版会の協力を得て、横浜市はもとより、大田区や目黒区などの生涯

学習センターをはじめ、幅広く展開し、慶應義塾のホームページにも「日吉キャンパス公開講座」が告知されています。

教養研究センターの拠点である来住舎ができてから、イベントテラスやギャラリーそしてシンポジウムスペースで、HAPPY(日吉行事企画委員会)主催による様々なイベントが開催されています。能、英語劇、写真展、オーケストラ演奏、奇術、ダンス、総合芸術などエネルギーで質の高いパフォーマンスが繰り広げられています。公開講座は、そうした実践ともリンクさせたい所存です。

3. 公開講座のあり方と展望

公開講座のあり方はまだ考える余地があるでしょう。横浜市民大学講座では、毎年秋に10回ないしは12回、土曜日の2コマで行ってきましたが、語学系や文化系さらに体育系や理数系など複数の講座を同時に進めることも可能でしょう。「源氏物語を読む」といった、少人数のゼミ形式の講座も魅力的です。若い受講者も開拓したいと存じます。

教養研究センターには、超表象デジタル研究といった様々な共同研究があります。これらの研究成果は、いずれ公開講座で発表されていくことになるでしょう。環境問題や地域文化論など先生方の個人的な研究による成果の発表機関としても本講座は機能していきます。個人研究と共同研究が共存し、スポーツとアートとサイエンスが融合するキャンパスの創出を目指したいと思います。

（小嶋昭夫）

Reports

学術フロンティア 「超表象デジタル研究センター」

2000年より5年間ということで始まった本プロジェクトは、最初の1年間は拠点施設の建設に費やされ、研究活動が始まったのは2001年度の春でした。そして2004年度は最終年度として、研究活動を締めくくる年となっています。本プロジェクトの研究活動のテーマは「表象文化に関する融合研究」であり、12の個別研究グループによって構成されてきました。

本年度の活動の課題は、個別研究グループが2年ないしは3年にわたった、それぞれの成果研究活動のまとめをすると同時に、プロジェクト全体としての総括をし、全体としての成果をまとめるということです。個別研究グループの成果報告は2004年11月6日の最終報告会においてなされましたが、本プロジェクトの最終報告書、ホームページ、パネル展示会などを通じて公開していきます。

人間の活動の相対としての文化は、さまざまな形で表現されているが、その全体を「表象」という概念でとらえ、それを個別に、そしてまた同時に全体として、より深く理解するにはどうすればよいかというのが、本プロジェクトの研究の出発点でした。そして、そのことと並行して、人間の「知」のあり方を多面的にとらえ、その「知」と「表象」のつなが

りを見直していくということも研究課題として当初から立てられていました。

また、本プロジェクトのタイトルが「超表象デジタル研究センター」となっていることから、上に述べたこととは別に、「デジタル化」ということと、既存の学問領域にとらわれない「融合的」な観点や方法の確立ということも、当初からの重要な課題でもありました。

個別研究グループでは、研究成果の多くがデジタル化され、すでにさまざまな形で発信されたり、近い将来に発信されるような準備ができています。また「融合化」という点では、授業への展開という形での研究と教育の融合、研究への学生や市民の参加や社会への成果の発信の多様な形態など、さまざまな形で大学内外との結びつきなどを通じて、大学と社会の融合が実現されています。

しかし、プロジェクト全体としては、これまで述べてきた諸課題について検討不足であったことは否めず、全体的な展望の下に個別の成果をいかに有機的に結びつけ、「融合的」なデータベースとして将来の研究や教育に役立つものにするかということと、将来の日吉キャンパスにおける研究活動のあり方への建設的な提言へと結びつくように、本プロジェクトをどのように総括するかということを含めて、現在「まとめ委員会」で検討し、最終報告書を作成しているところです。

(湯川 武)

秋学期のHAPPの活動

2004年度秋学期において慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会（以下HAPP）は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核として活動を行ってきました。

今年度採択された公募企画は、学生企画2つ、教員企画2つ、学生と教員の合同企画が1つの計5つでした。それぞれの企画には違った趣向が見られ、複数のイベントに足を運んだという方も多かったようです。いずれにせよ、すべての催し物は、昨年同様、大成功を収め、観客動員数も昨年並み、もしくはそれ以上あったかと思われます。また、これも昨年度と同様ですが、多くのキャンパス・コミュニティ外の方々（特に地域住民の方々）に鑑賞という形で各企画に参加していただきました。これは特筆すべきことです。つまり、HAPPの公募企画が、いかに日吉キャンパスを開かれた大学にすることに貢献しているかを表しているからです。

今年度秋の公募企画の最初は、NHKの佐々木元氏を講師として迎えて行われた、『大画面ハイビジョンで見る南極大紀行』でした。南極の映像を鮮明なハイビジョンで堪能することができただけでなく、実際に1年以上も南極で生活なされた佐々木のお話は映像以上にリアルでした。2つ目の催し物は、学生と教員が合同で企画した『Seasons』とタイトルされた、コ

ンテンポラリー・ダンスを中心としたものでした。宝塚出身の新田英里子氏によって振り付け、構成、学生指導、そして出演が行われ、魅力ある舞台でした。3つ目の企画は、学生による『幽庭 かすかば』と名付けられた、詩、音楽、舞踏、演劇、美術が一体となった舞台公演でした。来往舎のイベントテラスが最大限に有効活用された企画で、非常にクオリティの高い催し物でした。4つ目の企画は、高等学校の教員による企画で、競技スポーツとしていまひとつ知名度が低いトランポリンを紹介するということを目的とした、『弾めば、心も弾む!』というものでした。ここでは、トランポリンの魅力を十分感じることができました。最後の企画は、昨年度大成功を収めた『色即是空』の“続編”で、『色即是空2 CONTRUST』とタイトルされた、マジック、ジャグリング等が含まれた総合エンターテインメントショーでした。今年度も、大道芸を中心とした催し物ということもあり、小さなお子さんを含むとても多くの地域の方々に人気を博しました。

これらの公募企画にはHAPPより補助金が支給され、HAPPの監督下で企画が実行されました。各企画の実行者は、綿密な企画・計画書を作成し、企画終了時においては、来場していただいた方々の声を反映した報告書を作ることが義務付けられています。秋の企画についての詳しくは、HAPPのホームページ（<http://www.hc.cc.keio.ac.jp/happ/>）で知ることができます。

(石井 明)

教養研究センター設置講座

「スタディ・スキルズ」

教養研究センター極東証券寄附講座「スタディ・スキルズ」が、春学期の「スタディ・スキルズ」に引き続き、センター設置科目として秋学期に開講されました。この積み上げ科目の目標は、アカデミックな活動の技法習得です。水曜と木曜の5時限に2コマ設置され、それぞれ20名ほどの学生がとをセットで履修しました。教員3~4名が1クラスを共同担当するので、講義・演習ともに十分な指導態勢となっています。

は、ノートテイキング、情報検索、クリティカルリーディング、レポート・論文の構成の技法習得を目標とし、講義と演習に加えて「メディアセンター見学会」等も含んだ多様な授業が展開されました。学生は、教員が示唆したテーマに関する課題を自ら設定し、指導を受けながら学期末にそのレポートを提出しました。

はを受け、添削したレポートの講評から始まり、情報整理法（KJ法）、プレゼンテーション技法、論文書式が学習テーマです。学生は、第6回センターシンポジウム等にも参加し、またグループワークも課され、同様、さまざまな形態の授業を体験しています。水曜の学生はセンター設置の「生命の教養学」、木曜の学生は法学部設置「身体/感覚文化運動感覚」を併せて履修しているので、それらに関連する課題を設定の上、最終的に個人レポートを提出します。学期末、そのレポート集を冊子にまとめて学生に配布する予定。また、2月に水曜と木曜クラスの合同レポート発表会も予定しています。

来年度、この科目は「アカデミック・スキルズ」という新たな名称に変更され、今年度より多くのクラスが開講される予定です。これまでの経験を踏まえ、さらに充実した内容の科目となることが期待されます。

(下村 裕)



「生命の教養学」

今年度初めて授業として設置され、現在（2004年度秋学期）開講中の教養研究センター極東証券寄附講座「生命の教養学」は、21世紀の科学と社会の核心を構成しバランスのとれた総合的・複合的アプローチが必要とされる「生命」というテーマを軸に、文系・理系のさまざまな領域で活躍する研究者を招いて、「生命」をめぐる総合的・領域横断的思考力の構築を目指す、新しいオムニバス講座です。本年度コーディネーターとして、文学部・金子洋之、経済学部・鈴木晃仁、商学部・田上竜也、法学部・武藤浩史が参加しています。

今年度は「進化」をキーワードに、現代科学が解き明かした生命の成り立ちと人間の社会・歴史におけるその意味について、生物学の団まりな先生をはじめとする多彩な講師陣の刺激的な講義が展開中ですが、受講生からも積極的に質問が出て、いい雰囲気で行っています。もうひとつの教養研究センター極東証券寄附講座である「スタディ・スキルズ」とも内容を連携させ、そちらの講座の履修学生のレポートテーマ発見にも貢献しています。

2005年度は開講時期を春学期に移し、コーディネーターにも新しい血（=知）を導入（理工学部・熊倉敬聡、商学部・石原あえか、医学部・鈴木伸一、法学部・武藤浩史）して、「生命と自己」をテーマに、養老孟司氏をはじめとする第一級の講師陣を招いて、塾生に21世紀を教養豊かに生きのびてゆく術を幅広く伝えてゆこうと思っています。

(武藤浩史)

2004年度 第1回運営委員会報告

2004年9月13日（月）15時から16時まで、来往舎シンポジウムスペースにおいて、2004年度第1回運営委員会が開催されました。議事に先立ち、黒田昌裕常任理事から挨拶がありました。

最初に今年度前期の活動について、羽田所長の後任として、横山千晶法学部教授が就任すること（任期は平成16年10月1日から平成18年9月30日まで）、7月に「2003年度活動報告書」を刊行したこと、研究企画ボード、研究推進セクション、交流・

連携セクション、広報・発信セクション、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会からの定例の報告がされました。

引き続き、審議事項に移り、副所長人事について、近藤明彦体育研究所教授（重任）、田上竜也商学部助教授（新任）、岩波敦子理工学部助教授（新任）の3名が推薦されたこと（任期は平成16年10月1日から平成18年9月30日まで）、所員・兼任研究員の追加登録、組織の変更として、港北区民講座運営委員会を廃止し、日吉キャンパス公開講座運営委員会を設置すること、研究推進セクションの名称を活動実態に合わせて、「調査・研究セクション」と変更することが提案され、承認されました。

(宮木さえみ)

交流・連携セクション

2004年度の活動概要

前年度の活動をふまえつつ、2004年度の交流・連携セクションは、次のふたつを活動の柱としました。

「日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携」

「大学と一貫校との交流・連携」

まず「日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携」については、日吉商店街や横浜市の方々とは幾度か対話の機会を持ちながら、どのような形で大学が地域の活性化や街づくりに貢献できるかを検討しました。そうした商学連携の試みのひとつとして、今年度から商学部設置総合教育セミナー「21世紀の商店街」が立ち上がり、日吉やそのほかの商店街の実情や未来像についてフィールドワーク・研究を進めてきましたが、その成果を発表し、また地域住民や行政の側からの意見を聞く場として、2005年1月18日（火）に教養研究センター主催「開かれゆくキャンパス2：21世紀の商店街」シンポジウムが開催されます（p.8参照）。

また、教養研究センターの直接の活動ではありませんが、前年度に引き続き「ヒヨシエイジ2004」が盛況を博し、成功裡に終わったことはまことに喜ばしく、今後の交流の発展に期待を抱かせるものでした。

「大学と一貫校との交流・連携」については、前年度に引き続き、塾内一貫校と大学の教員との対話を進め、授業を通じた共同研究の可能性を探りました。

今後の課題

2005年度の目標としては、

「日吉キャンパスと周辺地域との交流・連携」をシンポジウムなどによりさらに深めるとともに、来住舎のギャラリーを使った展覧会にあわせ、学生や地域住民が参加するワークショップやレクチャーの企画・実行を支援していきます。

「大学と一貫校との交流・連携」については「開かれゆくキャンパス3」の企画として、塾内一貫校教員と協力しつつ朗読を中心とする実験的授業を一貫校で行い、その記録をもとにワークショップやシンポジウムを行う予定です。

（田上竜也）

第5回シンポジウム 「古典を核とした教養教育の将来」

2004年10月8日（金）16:30～19:30、来住舎シンポジウムスペースにおいて、教養研究センター第5回シンポジウム「古典を核とした教養教育の将来」が開催されました。教養教育と古典とは、不可分の関係にあります。本シンポジウムでは、古典の意味と、これからの可能性について問い直してみました。

パネリストたちの発表における、視点や立場はかなり異なるものですが、情報交換、意見交流を通じて、いくつかの共通する認識や問題意識が明らかになってきたと思います。古典そのものの概念の捉え方は、さまざまですが、それ自体自然なことで、（西洋の古典学がそうであるように）古典は時代とともに変化し続けるものであること。古典を教えるということの意味は、現在においてもいささかも減じておらず、むしろ教室という現場において「動く」古典がつねに再創造されていかなければ行かなければならない、ということ。そして、学生が感じる古典のある種のわかりにくさを、素材の選択と教える方法によっても、受け入れやすくする努力を怠ることはできない、ということでしょう。

単純明快さと、簡便さ、即利益を追求する現代であるにもかかわらず、あるいはむしろそうであるからこそ、次代に継承しなければならない古典があり、そのためにわれわれ教員は大きな責任を負っている、という矜持の気持ちを新たにすることができる有意義なシンポジウムでした。

パネリスト

納富信留（文学部助教授）
専攻分野：西洋古代哲学・古代ギリシア

チャールズ・ドゥルーフ（理工学部教授）
専攻分野：対照言語学・日本古代文学

小菅隼人（理工学部助教授）
専攻分野：英文学・イギリス16世紀

種村和史（商学部助教授）
専攻分野：中国古典文学・詩経解釈学史

武藤浩史（法学部教授）
専攻分野：英文学・イギリス近代

ディスカッサント

西村太良（文学部長）
専攻分野：西洋古典学・
現代ギリシア語

寺澤行忠（経済学部教授）
専攻分野：国文学

司会

佐藤 望（商学部助教授）
専攻分野：西洋音楽史



（佐藤望）

ヒヨシエイジ2004

スポーツとアートによる地域活性コミュニティデザインを目指すヒヨシエイジ2004は、日吉の地域住民と慶應義塾大学の塾生との協働によって、日吉台小学校での「華美（はなび）」（9月11、12日）企画を皮切りに、10月11日、陸上競技場での「フットサル・フェスタ」、日吉東急銀玉前広場での「Jazz」演奏（14:00）銀杏並木でのファンド形式による出店プロジェクト、「感情Tシャツ」ワークショップ、そしてメインイベント<HIYOSHI AGE CE>、日吉のフラダンス教室によるHULA（16:30）元氣瀧刺のユニコーンズによるチアリーディング（17:00）、学生団体によるジャズとフュージョン演奏（18:00）日吉商店街協同組合理事長薄井芳夫氏の挨拶に続き、迫力一杯の演奏で喝采を浴びた和太鼓DODAN-PA（18:30）奇術愛好会のサプライズ、そしてフィナーレはシンセサイザー演奏とグラフィック映像と打ち上げ花火さらにレーザービームによる芸術的なSINFONICA（19:30）で盛り上がりました。街中の銀行やギャラリーでの小学生たちの作品展示、来往舎での「花火」と「祭」写真展など、複合的なイベントでした。

（小淵昭夫）

第6回シンポジウム「少人数セミナー形式授業の理念・目的とその手法」

教養研究センター第6回シンポジウム「少人数セミナー形式授業の理念・目的とその手法」が、12月8日夕刻から来往舎で開催されました。パネリストは伊藤行雄氏（経）、朝吹亮二氏（法）、熊倉敬聡氏（理工）、坂本光氏（文）と司会を兼ねる種村和史氏（商）の5名。ディスカッサントとして近藤明彦氏（体研）、長谷川由利子氏（商）と経済学部生2名が加わりました。参加者は教職員学生を含めて約60名でした。

今回のシンポジウムは、センター基盤研究会の発意から企画されたもので、日吉における総合教育科目の学部共通化が急速に進行しつつあるなか、教養教育におけるセミナー形式授業の現状を学生の参加を得たかたちで学部横断的に照射しあい、今後のありうべき方向性について議論を深める試みでした。パネリストからは、各学部が日吉におけるセミナー授業を、学生の能動的な授業参加や相互啓発、基礎的な技法の習得を促す初年次教育の重要な核と位置づけ、さまざまな観点からこれを強化するための検討が行われているとの報告がなされる一方、学生からもそれに大いに期待するむねの発言が相次ぎました。また、学事課長の白石幸男氏から、来年度はセミナー形式授業の時間割を学部共通化するとの方針が示されたことも収穫でした。

（木俣 章）

教養研究センター「FDを考える」... セミナーからワークショップへ

連続セミナー「FDを考える」は、2003年10月のスタートから2004年の6月までに計5回開催されました。これまでのテーマは「FDの事例報告 アメリカの授業運営」松岡和美（経済学部）「学生による授業評価とFD活動 シラバスと授業評価・SFCにおける12年の推移」井下理（総合政策学部）「我が国の大学の欠陥 解消の一方法としてのG.P.A.制度」諸星裕（桜美林大学）「大学評価とFD活動」川口昭彦（大学評価・学位授与機構）「カリキュラム改革の今後の方向性とFDについて」黒田昌裕（常任理事）と、さまざまな観点からFDを考える機会を得てきました。

2年目に入った2004年10月以降は、授業をより良い方向に進めるために先生方が実際に授業運営でどのようなことを行っているかを紹介していただくワークショップ「FDを考える」がスタートしました。第1回は「双方向授業を目指して 携帯電話によるアンケート・小テストの実施」として物理学教室の小林宏充氏（法学部）を講師に



迎え、参加者は実際に携帯電話・インターネットを使った授業アンケートを自分の授業で利用できる環境設定を学びました。第2回目は「ことばにつばさを ドラマクラスと教育の身体アプローチ」(横山千晶氏・法学部)が行われ、実際に参加教員も体験し、また学生とこの授業の効果などについてディスカッションすることもできました。

先生方が授業で行っているさまざまなティーチング・チップスをこのワークショップでは取り上げて行く予定ですので、多くの方々の参加をお待ちしています。

（近藤明彦）

「教養研究センター選書」の 審査結果

「教養研究センター選書」は、教養研究センター所員・研究員の先端的な研究活動を、学生や一般読者にわかりやすく紹介するために刊行されています。第2回目の公募となる今年度は、2件の応募がありました。これを受けて、センターでは審査委員会を組織し、厳正な審査を行いました。審査の基準は、「当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を紹介することで新鮮な知の一石を投げ、研究・教育相互の活性化をめざそうとするもの」「研究分野は問わないが、学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で研究成果を著したもの」という二点です。

その結果、今年度は法学部の井上逸兵氏の「コミュニケーションは何でできているか」(仮題)が採択されました。コトバ風俗の観察を通じて社会言語学という学問体系を、学生・一般読者向けに具体例を挙げてわかりやすく論じています。選書は3月末に刊行予定ですので、どうかご期待ください。なお来年度も募集を行いますので、より多くの方々の応募をお待ちしております。

(岩波敦子)

「21世紀の商店街」 シンポジウム

2005年1月18日(火)16:30~19:00、来往舎1階シンポジウムスペースにおいて、「開かれゆくキャンパス2:21世紀の商店街」シンポジウムが開催されます。「今日の商店街が抱える問題をどのように解決し、街を活性化していくべきか」をテーマとして、商学部設置総合教育セミナー「21世紀の商店街」履修学生の研究成果を報告するとともに、地域・行政代表の方々や専門研究者を交え、商店街の未来について熱く語り合います。街づくりやコミュニティに関心のある多くの方のご来場をお待ちしています。

【プログラム】

第1部 16:30~18:00

学生発表:「若い視点と発想による地域活性化への提言」

第2部 18:00~19:00

パネルディスカッション:「大学は地域に貢献できるか?」

司会:牛島利明(慶應義塾大学商学部助教授)

パネリスト:

熊井憲一氏 (日吉商店街協同組合専務理事・
(株)日吉インテリア日吉代表取締役)

宮崎孝雄氏 (横浜市経済局商業・サービス業
課長)

平田光子氏 (日本大学大学院グローバル・ビ
ジネス研究科助教授)

(小瀧昭夫)

極東証券寄附講座「スタディ・ スキルズ」プレゼンテーション・ コンペティションの開催について

極東証券寄附講座「スタディ・スキルズ」は本年度、およそ40名の学生を対象に2クラスが開講されました。アカデミック・スキルズの構築のみならず、学部を越えたつながりはこれからの大学生活の中で参加者の大きな財産となることでしょう。ともにがんばった仲間たちと築いた学習成果を、ぜひとも披露しようということで、本年度は極東証券社長をお招きして2005年2月8日(火)にプレゼンテーション・コンペティションを開催することになりました。それぞれのクラスから選ばれた6名が、代表としてリサーチ、およびプレゼンテーション能力を競い合います。また、コンペの準備と運営も参加者からなる運営委員会が中心となって行われます。「スタディ・スキルズ」恒例の行事となりそうなこのコンペティションは、いままで培われた知の探求能力のみならず、学生の横と縦のつながりが遺憾なく発揮される熱い一日となることでしょう。ぜひとも学生の活躍ぶりを観にいらしてください。

(横山千晶)

事務局だより

2004年が過ぎ、2005年という新しい年を迎えました。教養研究センターでも新しい所長を迎え、さらに新たな試みが続いています。

たとえば、私が携わっている「調査・研究セクション」では、連続して行っているFD(Faculty Development)への取り組みの中で、これまでのセミナーからワークショップへと形を変えた、より実践的かつ実験的な内容を展開しています。

2004年の後半に行った2回のワークショップ(「双方向授業を目指して 携帯電話によるアンケート・小テストの実施(第1回)」「ことばにつばさ」ドラマクラスと教育の身体アプローチ(第2回))は、そのいずれもが、学生の積極的な参加を促す授業を具体的に提案する非常に興味深い内容で、それぞ

れのセクションの活動の中でも活発な議論が交わされました。

このような変化の流れに携わる貴重な機会に恵まれていると思いきも新たに、私たち事務局も、新しい試みを続ける先生方の支えとなれるよう、より柔軟な態勢を心がけるべく努力を続けたいと考えています。

(佐野真知子)

Newsletter

2005. Jan. No.5

慶應義塾大学教養研究センター

Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2005年1月15日

代表者 横山 千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

=お知らせ=

教養研究センター所員の募集

センターでは専任教員の方々にさまざまな企画や研究活動を通じて、センターの運営に参加していただいています。教養研究センターの活動に関心のある方は所員にご登録ください。詳細はコーディネーター・オフィス担当まで

(担当 内線33012 宮坂)